

近代大阪の演能場

関屋 俊彦

はじめに

大阪が大阪になって以来、すなわち近代に入ってから大阪における演能の場について考察してみる。その際の演能場とは、本格的な能舞台だけでなく、仕舞や謡などが行なわれた個人の家も含めた場も含めることとする。

太平洋戦争は、大阪においても空襲の被害は甚大であった。人的被害は言うに及ばず、能舞台も当時日本一といわれた大阪能楽殿や山本家の能舞台などが焼失した。失われてしまった貴重な資料も多い。筆者は、以前「上方能近代百年 世阿弥以来の盛況」(平成十二年十二月・『上方芸能』)を書いたことがある。それは「上方」というもう少し広い範囲で、しかも大急ぎで締切りに間に合わせたものであったが、それ以後入手した石田蘆笛画「博物場と天下茶屋の能楽堂」(仮称)や大正時代の大阪発

行である『能楽写真界』や管見に入った資料を整理すると、大阪に於ける戦前の能楽への興味は、結構活況を呈していたことが見え始めてきた。今回は、大阪を中心にした演能の場を考察の対象として報告するものである。その際、大阪は大阪市内だけでなく、大阪府にまで広げて考えたい。

一、石田蘆笛画「博物場と天下茶屋の能楽堂」

大阪の能舞台に、より興味を抱き始めたのは、石田蘆笛なる者が大正三年に描いたスケッチ帖を手にすることができたことによる。それは大阪博物場と天下茶屋の能楽堂での演能を主として描かれたものである。まずは、それを紹介したい。仮綴大和綴楮紙全六冊で、次の①③は、288×400ミリ、④⑥は、200×278ミリの寸法である。簡単に内容を記す。カット参照。

① 24枚。「表紙」大正三年如月末二日／天下茶屋能楽堂

茂山良一《三番叟》・中村弥三郎《嵐山》・《鎧》・大江又三郎
《実盛》・服部能楽堂・田村弥三《熊野》・片山九郎右衛門《正
尊》・伊藤隆三郎《狸々》

② 32枚。「表紙」大正三年甲寅弥生中五日新調／石田蘆笛生

舞台平面図(南久太郎町心斎橋東入南側 大工古橋)・地裏よ
り舞台スケッチ(天下茶屋服部能楽堂)・佐藤助七《邯鄲》・茂
山良一《太刀奪》・豊公醍醐花見所用巨瓢京都大角妙法院・清
正職・桃山御殿百双屏風・蓮池藤棚

③ 34枚。「表紙」大正三年甲寅水無月中三日新調／石田蘆笛

生

於博物場／能楽倶楽部主催・福井栄太郎《葛城》・大江又三郎
《隅田川》／府立図書館で『国諷』などから転写。

④ 20丁。「表紙」大正三年甲寅弥生初旬新調之。舞楽図

近松座に於て、鉢木間狂言 泉祐三郎・《勝栗》等

⑤ 10丁。「表紙」大正三年甲寅弥生のはじめ。舞楽図

《武悪》等。

⑥ 14丁。「表紙」大正三年三月十四日泉右博物場にて 小面

面裏「橘芳高作」・三月十四日夜於杏林倶楽部／主催調風会・
琵琶演奏・たかしまや美術部・能楽世界表題立案・京都市内、

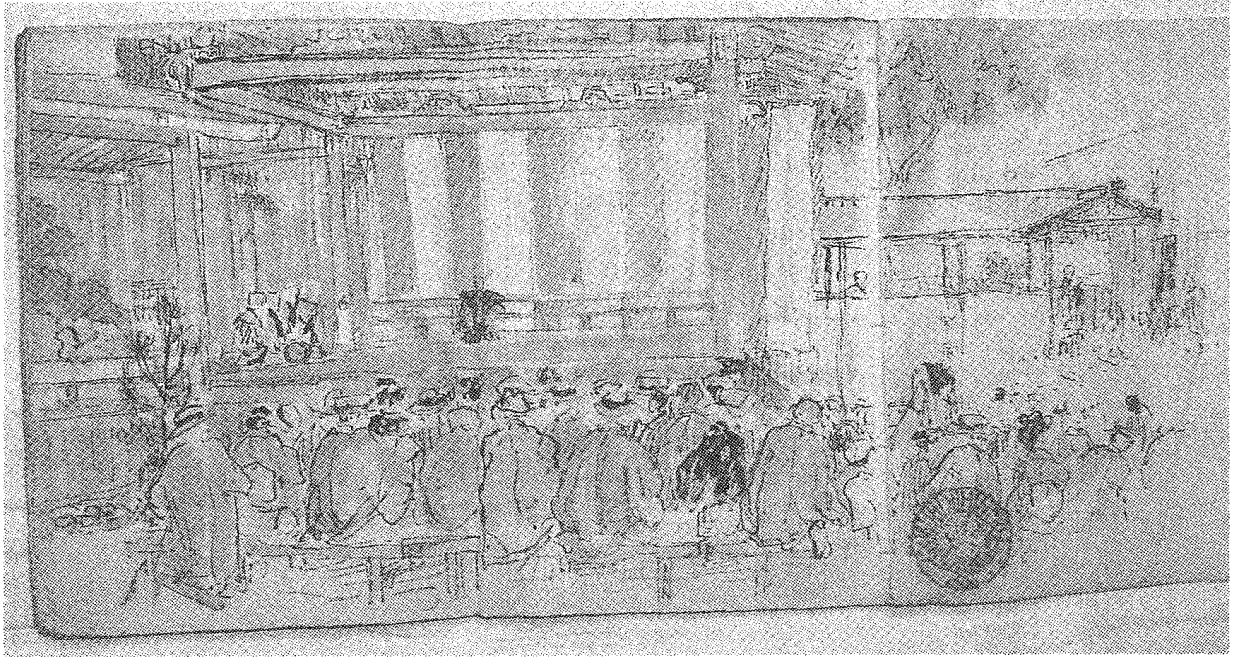
俵・樹木図・尺八合奏図

以上であるが、この「石田蘆笛」がわからない。こういう絵
にお詳しい中谷伸生氏(関西大学教授)に伺うと、絵はプロの
画家のタッチで、あるいは「中川蘆月」の系列ではないかとい
うことである。中川蘆月は、大正十三年になくなっていて大阪
の日本画家であり、師匠は木下蘆舟である。「蘆」字を踏襲する
とすれば、ありえるのだが、それ以上はよくわからない。

二、大阪博物場の問題

まず、大阪博物場であるが、先述の『上方芸能』に私は、次
のように書いた。

【一、明治三十年代「大阪博物場」大阪博物場では菅公千年祭
ということ。〇二年(明治三五)三月に(京都北野天満宮では
四月)、大阪博覧会協賛能ということ。〇三年五月に西から大
西閑雪・片山九郎三郎・生一左兵衛、東から野口政記・松本長・
宝生九郎という当時の名人たちが参加し演能している。さらに
〇五年は観阿弥五百年祭ということで東京に呼応して関西では
四月に神戸和田神社・片山能楽堂とともに大阪博物場で豊公三
百年祭(一八九八)以来と称しての大々的な演能会が行なわれ



博物館舞台

た。

この大阪博物館だが、〇六年十二月十六日付の『国民新聞』の評によると、大阪に能楽堂の完備したものはなく、曾根崎の大西家は稽古舞台で、よく利用される松屋町の大阪博物館は平瀬露香（〇八年、七十歳逝去）が設立したが、動物園の隣で見所も吹きさらしであったようだ。観世流に藤田伝三郎、ワキ方に福王に鴻池伝三郎と言った後継者がいることにはいるが、「大阪は能楽師に於ては不向きの土地」と酷評されている。東京発の記事とは言え、大阪の能舞台はみじめな状態だった。」

この箇所は、倉田喜弘氏『明治の能楽』三（国立能楽堂・平成八年三月。『明治の能楽』四冊と『大正の能楽』一冊の計五冊）によるところが多かったが、大阪博覧会とは、第五回内国勧業博覧会のことである。『大阪商工会議所百年史』（昭和五十四年・大阪商工会議所）によれば「江戸時代の西町奉行所あとに建設」されたものである。そして、その後『東区史』（昭和十六年・大阪市東区役所）に次のようにあるのに気づいた。

【明治初頭は此の外に狂言師鷺流の所有舞台があったが之亦時代の風潮に持続し難くなり有志家を買取られ、その後生国魂神社境内に移されたが明治十二・三年頃から用ひられず、更に高村太左衛門等有志の尽力で中之島に移され、翠柳館舞台として

再建せられたのは明治十六年のことであった。併しその後此の舞台は取払はれて博物場内（内本町橋詰町）に移された。かくして博物場の舞台は日清戦役後までは余り立派ではなかったが、有力家により改築が加へられ、明治三十一年十二月に落成を見た。総工費五千六百円、建坪は舞台十五坪二合、橋がかり九坪六勺と伝へられる。】

生国魂神社での演能は『明治の能楽』によれば、一番早い記述は明治十年四月二十六日付「大阪日報」である。そして、写真も載せられている博物場の舞台は、元々は鷺流の専有舞台であったというのだ。しかるに、その後、出版された『続東区史』（昭和五十六年・大阪市東区史刊行委員会）には、鷺流舞台云々のことは省かれている。明治初頭の鷺流で大阪に住んでいたのは、鷺源右衛門が考えられる。『狂言辞典事項編』（昭和五十一年十二月・東京堂出版）には次のように記す。

【鷺源右衛門 江戸末期から明治初期にかけての鷺流狂言師。大阪在住。鷺仁右衛門家および伝右衛門家とは血統上の関係はなかったともいうが、野々村戒三「系譜」（『能楽史話』所収）には仁右衛門定義の息として記され、「大阪居住」と見える。安政三年（一八五六）、主として大阪の能楽師によって取りきめられた定書には連署しており、鷺姓を名乗っていることから考えて

京阪鷺流の名家として扱われていたものらしい。家に同地方では有名な舞台もかまえていた。】

その後の同舞台であるが、『狂言辞典事項編』では「源右衛門家の舞台は明治維新後、生国魂神社→翠柳館→偕行社と移され、そのまま立ち腐れとなった」とあるが、『続東区史』には次のように記載する。

【早くから生国魂神社境内にあった舞台は、明治十六年、中之島の翠柳館に再建されたが、三十一年十二月、内本町橋詰町にあった大阪博物場に移された。構内の北寄りに、御殿風建築の衆楽館というのがあって、百畳敷程の大広間がありました。この広間を見所にして庭を隔てて南面の舞台が別棟で建ててあったのです。この庭にも床机を並べて見所にしました。この舞台も、たしか昭和八年だったと記憶していますが天満宮境内に移築されました。（大西信久『初舞台七十年』、昭和五十四年刊）天満宮境内の舞台は、戦災をまぬがれたが、その利用がすくなく、五十三年、豊中服部神社境内に移された。】

沼艸雨氏は「大阪の能」（『難波大阪』昭和五十年十一月十五日・講談社）で、橋岡の舞台について「経済的に豊かであったのか、明治十一年に平野町一丁目に四百坪（約一三二〇平方メートル）の土地を購入し舞台を建てた」と記したあとで、博

物場の舞台について次のように記している。

【狂言鷲流のものが売却されることになった時、篤志家が世話をして、生国魂神社の境内に移した。橋岡の舞台よりも早い明治十年である。記録によると「建坪三十一坪九合五勺、舞台十坪九合、橋がかり十坪五合、楽屋六坪。舞台桁行四間半、梁行三間、高さ二丈、屋根十八坪九合、但瓦葺。橋がかり桁行七間、梁行一間半、高さ一丈六尺、屋根十八坪、但瓦葺。」とあるから、移築に際して、相当手を加えた模様である。しかし十二年ころからはまったく使用されなくなったので、陸軍が買って中之島にあった招魂社に移したので、「招魂社の舞台」と呼ばれるようになった、というのであるが、能画家松野奏風の岳父・谷村捨次郎（金剛流高村太左衛門の門下で舞台にも立ったことがある）の話によると、「舞台の鏡板の松を狩野永祥が長い間かかって舞台で揮毫していた」というのだから、それからすると新しく造ったものと思われる。場所は中之島の市庁の裏、前の豊国神社のあたりであろうか。見所（客席）はなかったが、場所は広く橋がかりは五、六間もあつたようで、平素は舞台に掛戸を下して稽古にのみ使われ、催能は当時のことだから年に五、六回で、その時は見所に棧敷を設け、三百人くらいが見られたようである。橋岡の観世社に対して、南陽社といって、京

都の金剛謹之輔や高村ら金剛流が、そしてその後援者である平瀬亀之輔らによって使われたのである。この対抗は明治十八、九年ころまで続いたが、橋岡は舞台も維持困難で売却され、この翠柳館の舞台も、本町の博物場に移転されて、両者の対抗に終止符が打たれた。この舞台を翠柳館というのであるが、これはあのあたりは柳が多いところから宮崎鉄幹が名づけたものである。この鉄幹は、のちに大阪博物館長をしたこともあるのだから、自分の命名したものを再び整理したことになる。舞台の経過は別として、この舞台は大阪唯一の舞台として、東西の大家が競って出場、大阪の能楽史に不滅の功績を残している。これが大正八年（一九一九）に大阪能楽殿が建設されてからは、段々利用度が減じて、いささかもてあまし気味になったところへ、土地の所有者の大阪市から適當の地への移転を働きかけられ、種々物色して最後は引き取ってくれる所には無償でも、とまでいっていたが、それでもうまくゆかなかつた。それは移転費に思わぬ費用がかかるからであつた。こうしているうちに紳士連中の内の渋谷利兵衛とか生形貴一というような好事家の世話で、天満天神宮へ移すことになり、その費用捻出のために、素人による名残り謡会を催し、その収益によってようやく移転した。これが現在の天満宮の舞台である。残念ながら最近使

用されておらず、昔を知るものにとっては、なげかわしい有様になっている。因にこの費用は二万円くらいだったようだ。」

文中の翠柳館については『明治の能楽』にも「日本立憲政党」を引き、明治十七年六月二十四日付に「金剛流高村太左衛門は、今度中島公園地の記念標構内に能舞台を新築せんとの企て」とあり、九月二十七日に落成、十月十一・十二日に舞台披をし「翠柳館」と名づけるとある。又、『中乃嶋誌』（昭和十二年十月十五日・中之島尋常小学校内記念会）にも明治十七年十月十一・十二日の舞台披の番組を紹介した上で、野々村戒三『能楽古今記』に明治十六年三月九日とある翠柳館での番組はあるいは仮設舞台ではなかったかと推測している。

宮本又次氏は、沼氏の文を殆どそのまま受けて『大阪の経済人と文化』（一九八三年）昭和五十八年六月三十日・実教出版）「第三章 大阪の能舞台と経済人」でも紹介している。沼氏文と重ならない後半部分を次に引用する。

【明治記念碑は偕行社構内に移り、能舞台は取壊されることになる（『中之島誌』七二二―七三四頁）。先の橋岡の能舞台も維持困難となって、明治十八九年頃ついに売却されており、また翠柳館も取払われるに至る。大阪博物場は大阪府が明治七年九月内務省の認可を得て内本町橋詰町旧西町奉行所（旧府庁の建

物を改修して、明治八年十一月より開場したものの。十二年公立大阪博物場と改称し、綿糖共進会などを開催したりした。十七年三月府立博物場を移し美術館をもつくり、その後も地所を拡張した。能楽殿は早くより設けられていたが（中之島翠柳館を移したともいう）初代博物館長の平瀬露香の能楽ずきもあって発展し、三十年には能楽殿の改築にも着手した。三十六年第五回内国勸業博覧会のときから陳列所、売店、動物園をもって構成されるに至る。明治三十一年十二月、新規になった能楽殿は総工費五六〇〇円、建坪一五坪二合、橋がかり九坪六寸であった。博物場内の北寄りに御殿風の建築集楽館があり、そこに百畳敷くらいの大広間があり、この広間を見所として庭をへだてて南向きの舞台が別棟で建てられていた。この庭にも床机をならべて見所にしていた。】

少しわかりにくい文になっているが、博物場舞台については沼氏は本来鷺流舞台説を取っているが、宮本説は「翠柳館も取払われる」としつつも一方で「中之島翠柳館を移した」との両説を併記しているようである。そして『狂言辞典事項編』では「生国魂神社→翠柳館→偕行社と移され、そのまま立ち腐れとなった」とし、鷺流舞台は消失したとしている。『狂言辞典』で「偕行社」とするが、これは沼氏の言うところの「明治九年（一

八七六)に明治天皇が、大阪偕行社へ行幸された時」の大西閑雪・亮太郎の演じた《橋弁慶》をきっかけとする演能の場である。

ここで今一度『明治の能楽』で確認すると、明治十年六月一日に「本町博物場」が初めて記録される。これが「明治七年九月内務省の認可を得て内本町橋詰町旧西町奉行所」旧府庁の建物を改修したものである。この博物場での演能は、その後幾度も確認されるのだが、明治二十九年四月二十二日付「大阪朝日」によると「当市博物場内の能楽堂は本月限り取毀つこと、なりしに付き、明後午前十一時より同舞台納めの能楽ある筈」と記されることになる。念のために実は同じ「大阪朝日」の同日付に「来る二十六日は中之島翠柳館の能舞台にて生一庸の能楽あり」とあつて博物場と翠柳館の舞台は書き分けられている。結局、私は『狂言辞典』で偕行社に移されたのは明治記念碑や見所の衆楽館であつたと読み取るべきものではないかと思うものであるが、鷺流舞台はやはりなくなつたと考えるものである。それは第一に『明治の能楽』明治三十一年十二月一日付「大阪朝日」に「市立博物場にて建築中なりし能舞台の工事落成したるにつき、来る四、五の両日、観世流に喜多流加りて舞台開の能楽を執行する」とある。第二に沼氏や宮本氏が書かれ

た時点では、天満宮舞台は使われることもなく放置されていた訳だが、昭和五十三年になって豊中市服部元町にある服部天神宮に移築されることとなる。そして同神社には次のようなそれぞれ移築された時の棟札が残されている。

① 明治三十一年七月十五日上棟

建築係

総肝煎 藤井周太郎

大阪府技手 岡崎要言

京都市下京区猪熊通七条

天照皇大神

棟梁 雑賀長右衛門

工事監督

井上節

肝煎

藤七左衛門

② 明治三十一年八月十三日上棟

建築係

総肝煎 藤井周太郎

大阪府技手 岡崎要言

京都市下京区猪熊通七条

天照皇大神

棟梁 雑賀長右衛門

工事監督

井上節

肝煎

牧野仁作

肝煎が交代して二度にわたつて上棟式が行なわれていた訳であるが、これら棟札があることにより、能舞台は棟梁雑賀長右衛門の手により新築されたものと判断するものである。その上、沼氏自身も記されるごとく「移築に際して、相当手を加えた」ものであるし「鏡板の松を狩野永祥」が描いたとあるように元々の鷺流の舞台とは言えないものとなつていからであ

る。私の『上方芸能』の記述も訂正しなくてはなるまい。

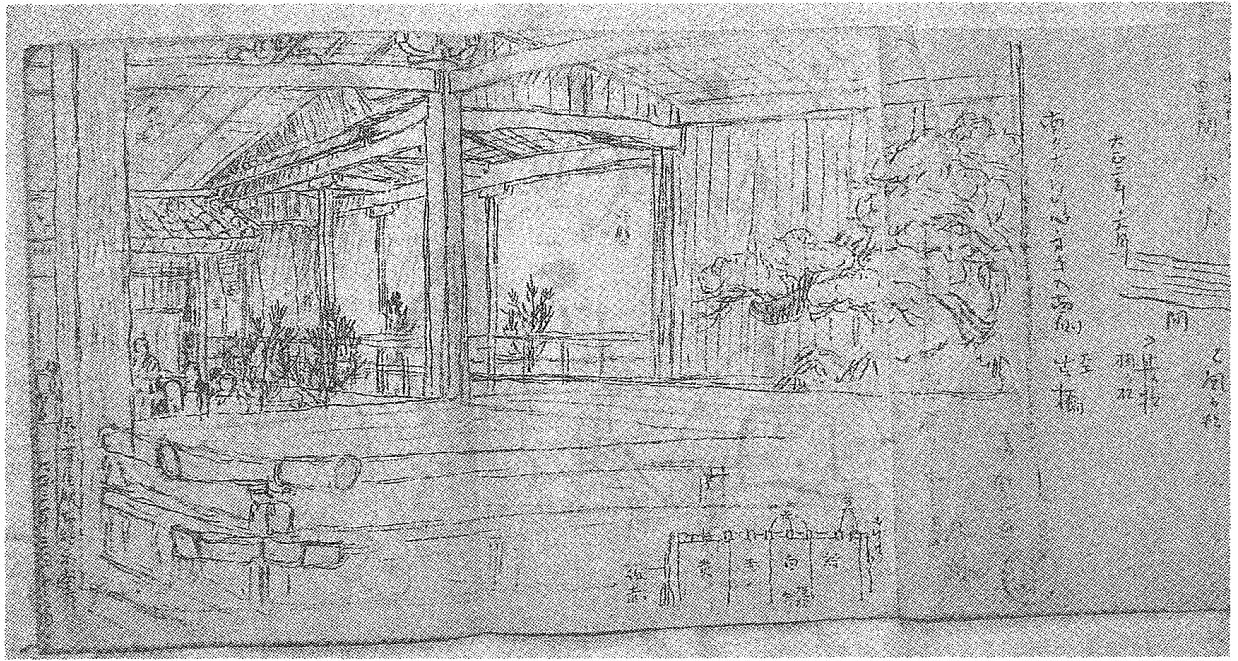
さて、『明治の能楽』明治三十二年四月十三日付「大阪朝日」に見られるごとく、その後は流派の対立で、せっかくの舞台がしばらくの間演能に使用されることはなく、翌年四月になって大阪能楽会が設立され、ようやく五月五日に府立博物館能楽堂と称して行われるようになったようである。更に服部天神宮には、もう一枚、昭和二年、博物館から大阪天満宮に移築竣工された時の棟札も残っており、それには小西新右衛門以下中村弥三郎・手塚亮太郎・生一佐太郎・大槻文雪など二十七名の名前が連ねられている。

昭和五十三年の服部天神宮への移築は、加藤知衛宮司の御英断であった由を御当人から伺ったが、移築された能舞台は、現在も薪能などで地元の人たちに親しまれている。しかし鷺流の舞台であったとの傍証は、建築学の立場から調査された永井規男元関西大学教授や神社と最も関わりのある能楽師の大西智久氏に伺っても得ることはなかった。たゞ能楽師の山本勝一氏が幼少のみぎり博物場の能舞台には父親に連れていってもらったとなつかしそくに話されていた。そして、山本能楽堂からは歩いてすぐのところだとも御教示いただき、それが大阪商工会議所のところであったこともわかったのである。

なお、架蔵のデッサン中、もうひとつの天下茶屋の能楽堂は服部能楽堂のことであり、天下茶屋聖天坂生一能楽堂とも言う。倉田喜弘氏『大正の能楽』大正二年十一月二十二日付「大阪朝日」に「生一庸は東京宗家より服部姓を許されて服部庸矩と改名し、二十四日午後一時より天下茶屋能楽堂にて催す」とある。また、大正八年十一月十八日付「大阪毎日」に改築披露の記事がある。これは能楽殿新築に対抗したものである。また、大正十一年六月十九日付「大阪朝日」に「十周年祝能」の催し予告がある。こちらは残念ながら戦災で焼失してしまった。

三、『能楽写真界』

坂田泰氏から故昭二氏の遺品を何点かいただいた。坂田昭二氏は『浮瀬（うかむせ）奇杯ものがたり』（和泉書院・平成九年）など晩年に能楽にかかわるお仕事をしている途中でなくなられた方である。ほとんどが市井に戻されたと伺っていたが、まだ何点か残っていたのである。その中に『能楽写真界』が入っていた。第六号（大正五年十月）・第七号（同十一月）・第十号（大正六年二月）・第十三号（同五月）である。なんでも集めて



天下茶屋舞臺

いらっしやった方だったのだと改めて感慨にふけりながら見てみると、これが奥書に「大阪市南区日本橋一丁目卅九番地」とある。すなわち大正時代に大阪で発行されていた。恐らくあまり知られていないこの能楽専門誌は、幸い大阪女子大学（現在は、大阪府立大学）図書館にバックナンバーが保存されていた。創刊号は大正五年五月十日発行、編集兼発行人は太田磯吉、印刷所は佐野禎藏の佐野工振社、いずれも大阪市内の者である。「発刊の辞」は無記名であるが、若林春江の「発刊を祝して」によれば「知友吉田友芳君が四五人の同人と相謀つて」とあるので、執筆の中心人物は吉田友芳であろう。さらに「吾等多年の経験に基く写真術を応用して」とあり、二号（大正五年六月十日）奥書には五月とあるも誤植）には「趣旨」として「此誌を営利的に発行する者では有ませぬ」と述べているので、写真を業とする能楽愛好家が少数印刷しただけのものであったことがわかる。それも三号（同年七月十日）には「本号口絵に挿入したる天然色写真は普通の彩色印刷より転写したる三色版とは、其撰を異にし仏国ルミエル会社製の天然色写真オートクローム乾板を以て撮影したる、本会独自の写真にして」と、その技量を誇っている。また、倉田喜弘『大正の能楽』によると大正五年五月一日付「大阪毎日」に「能楽写真会 素人写真会

に覇を称し居れる浪花写真倶楽部員中、吉田友芳、芦田閑月、藤井由成、西井蕪山、女川壹三などいふ顔触れにて能楽写真會といふを組織し、能楽関係の写真を製出し、大に凝つた印刷にして会員に分配する由、事務所は当分日本橋一丁目三十九番地に置くと」ともある。名誉顧問として服部庸矩以下能楽師二十八名を列記している。

書名から類推される写真だけでなく、桃太郎「五流の起原」といった論文、如暁閑人「謡曲『呉服』に就て」といった作品研究があるのを見れば、東京発の『能楽』などの雑誌に刺激された構成を持つものとなっている。但し、「今月の催」に見られるように、特色としては大阪を主とした上方での演能の記録を写真と共に中心に据えていることである。のちになると例えば第八号（同年十二月）には東京の観世家元舞台や朝鮮釜山芳千閣にまで赴いているものの中心は大阪である。その上、演能記録は、丹念に拾っているもので、知られている『能楽』などの雑誌よりは、大阪の情報はそれだけ詳しいといえる。たとえば五号（同年九月）には「楽堂氏の鼓筒漫話（上）」に、のちに山崎楽堂と『鼓筒之鑑定』を出版した生田耕一のことを書かれている（拙稿「対談生田秀・耕一を語る」『関西大学図書館フォーラム』2005等参照）。第九号（同年一月）には高安六郎氏談と

して山内容堂公旧蔵で安田本にならなかった『北派散楽秘訣』のことが、第十四号（同年六月）と第十五号（同年七月）には「紫式部の伝記に関する与謝野晶子女史の発見」が連載されている。また、田中智学新作『後の羽衣』の全詞章を載せているが、同曲は西野春雄氏補訂『古今謡曲解題』にも取り上げられていない曲である。

十五号（大正六年七月）まで確認できている訳だが、これで終刊したのか実はわからない。終刊宣言が出ている訳でもない。今後の課題としたい。

今、この『能楽写真界』から大阪のどこで演じられているかを拾ってみるのも意義あることであろう。その際、標題の「大阪」は大阪府にまで広げてみる。又、本格的な演能が能舞台で行なわれている場合と、それ以外すなわち謡・仕舞・舞囃子など同好会も含めた場合とは区別した。表は場所と初出の月日と会名のあとに主要な演者名を記した。①は創刊号（大正五年五月）、②は二号（同六月）、③は三号（同七月）、④は四号（同八月）、⑤は五号（同九月）、⑥は六号（同十月）、⑦は七号（同十一月）、⑧は八号（同十二月）、⑨は九号（大正六年一月）この号以下大正六年の記述となる。⑩は十号（同二月）、⑪は十一号（同三月）、⑫は十二号（同四月）、⑬は十三号（同五月）、⑭は

十四号(同六月)、⑮は十五号(同七月)である。五十音順に並べてみたが、正式な読み方が不明な場合は音読みに従った。個人名だけのものはとらなかつたし、大阪でない場合あるいは大

阪に入れるべきものもあるかも知れない不明は残るが、おおよその傾向はわかるはずである。

〔能舞台〕

場所	会名	初出	主要演者・演目
大阪博物場能楽堂	大西定期能	① 4月16日	大西亮太郎・茂山忠三郎
小西邸(伊丹)	小西邸能楽	① 5月21日	大西亮太郎
松諷社舞台(東梅田町)	松諷社月並	*② 有芳能舞台とも。小西新右衛門が継承。	
道明寺土師神社	道明寺能	② 5月22日	大西新三郎 金剛巖・謹之輔・山田三郎 *年一回の催し。③に写真
白水社舞台(岸和田旧城内)	岸和田能楽	④ 5月19日	杉江櫻圀
服部能楽堂(天下茶屋)	服部定期能	② 6月4日	服部庸矩・林喜右衛門・茂山千五郎 *④北堀江に新建する由
藤田男爵邸	藤田家(網島)能楽会	① 5月6・7日	梅若六郎《望月》古式
〔謡・仕舞・舞囃子など〕			
相生樓(天満)	楽謡会	③ 6月11日	佐藤林之助
開口神社瑞祥閣(堺市甲斐町)	葵会松声社番囃子会	⑮ 6月24日	大塚西水
苜屋(南堀江木綿屋橋西詰)	大阪三雲会	⑧ 12月3日	栄国純久
淡路町美術倶楽部	梅若素謡会	② 5月8日	山口直知
淡の輪かどの樓	公諷会	⑤ 9月17日	竹谷貞一

伊丹栄助宅 (天満小幡町)	生楽会	③ 6月21日	田原楽堂主催
一力樓 (堺大浜)	大西松諷社歌仙会	③ 7月2日	菊田松遊
魚萬樓 (京阪線守口)	謝恩素謡会	④ 7月16日	尾崎禎造主催
梅の家 (高津神社)	仲田正諷社	① 5月6日	生一正雄
大阪博物館衆楽館	能楽倶楽部囃子会		*②に評
大阪美術倶楽部 (東区淡路町)	稲田貞治送別大会		嶋豊舟
大阪毎日新聞社倶楽部 (浜寺公園)	萬寿会	⑧ 11月5日	高来梧亭
勝尾寺大広間	箕面素謡会 (箕面付近の好事家)		
花月亭 (上本町六丁目)	富韻社	⑥ 11月19日	辻忠輝
川井氏別荘 (天下茶屋)	花岡緑声社	④ 8月20日	花岡緑主催
岸松館 (西長堀)	本富清諷会	① 4月2日	大西氏
銀水樓 (中之島)	鳳鳴会	⑩ 2月11日	片桐正勳
雁風樓 (今宮)	松声社 (平井松風氏)	② 月日不明	金森清様
菊池邸 (浜寺)	緑樹会	⑧ 11月3日	菊池侃二 (大阪宝生流)
錦水樓 (中之島)	栄氏大会	① 4月2日	松本二伏
光照寺 (平野町十丁目)	仲田正諷会	⑫ 4月21日	仲田宗豊
高津神社湯豆腐屋 (高津)	生正会	④ 7月29日	奥田亀之助
広徳寺 (南久太郎町1丁目)	八声会月並	⑮ 7月11日	水谷藤
神戸宅 (鍛冶屋町鰻谷南)	真謡会	⑤ 9月11日	神戸治助・生一門下
極楽寺 (西野田)	先考五十年追福謡曲囃子会		

商盛組事務所 (東区唐物町一丁目板屋橋筋)	三春会月並	③ 7月9日	稲田貞治主催
松風庵 (天下茶屋)	生鳳会	⑤ 9月10日	金沢秋甫
書籍俱樂部 (西横堀木綿橋西詰)	真謡会	⑨ 1月6日	神戸
書林俱樂部 (南堀江)	田原生楽会	⑬ 4月11日	田原楽堂
聚楽館 (堺市天神社)	大畠松琴会	⑧ 11月23日	井上梅溪
寿福院 (上本町)	南交諷会	⑧ 11月25日	永井勝月
薪炭商事務所 (南堀江隆平橋)	玉淵会	③ 6月9日	稲田貞治
翠香庵 (住吉公園)	栄保介氏月次会	② 6月16日	真静堂
住吉亭 (西成郡役所)	小島桂諷会	⑨ 1月15日	福田宗英
千秋館 (箕面)	生楽会	⑧ 11月17日	杉本浄泉
船場俱樂部 (南区三休橋北詰)	玉淵会	⑮ 6月23日	天野社宇
大丸 (心齋橋清水町)	真謡会月並	⑫ 4月11日	神戸
玉出社 (南海線玉出駅)	花岡緑声社	③ 7月16日	花岡緑
貞松院 (上本町六丁目)	喜多十番会	⑤ 9月17日	幹事吉村楽天
天狗樓 (順慶町)	交諷会	① 4月3日	*山下雅楽之輔《春日龍神》写真あり
天満天神社参集所敷舞台	橋岡奉納囃子	⑧ 12月14日	橋岡
東郷村身延客殿	松声社素謡会 (豊能郡東郷村有志)		
南陽館 (天王寺常盤通停留所前)	真謡会	③ 7月9日	神戸治
花岡緑宅 (南海線玉手駅東)	緑声社	③ 月日不明	花岡緑主催
羽田 (堂島)	四季会	③ 6月不明	

*⑤には木炭商

はり半 (心齋橋北詰東入)	大原民諷社
備一樓 (東区備後町)	伊藤保聲会
瓢々亭 (天下茶屋)	竹谷公諷会
福寿院 (本町九丁目)	南交諷会
仏願氏 (北区古川町中津橋)	西部稲友会
鮒卵樓 (網島)	橋岡淡交舎
古川商会 (北区曾根崎上四丁目)	小島桂諷会
法恩寺 (伊丹町)	岩名氏謡曲会
法巖寺 (伊丹駅四二丁目)	追福謡曲会
芳千閣 (南浜町)	釜山各流謡曲会
水谷宅 (本町堺筋)	八声社
南船場倶楽部 (長堀三休橋停留所前)	南北会
明月樓 (難波駅前)	大西閑雪喜寿祝賀会
めんも樓 (池田町)	(佐和) 尚諷会
安井神社社務所 (天王寺)	翁会 (佐野光太郎氏)

四、能舞台の数

以上『能楽写真界』から読み取れることは、大正五・六年当時、大阪府下で本格的な能が演じられる能舞台としては六箇所

⑬ 4月15日	大原民三郎	*大阪紳士間の謡曲家。住友吉左衛門・伊藤忠兵衛等。
① 4月23日	津川仙次	
⑥ 10月24日	河村是空	
② 6月3日	田中鳥参	
⑤ 9月23日	浄弘稻華	
① 4月25日	観世元滋・橋岡久太郎・大西亮太郎	
③ 7月15日	福田宗英	
④ 4月日不明	岩名萬二郎主催	
③ 7月2日	岩名萬二郎主催	
⑧ 11月12日	平島文士	
⑮ 6月21日	水谷	
⑭ 5月24日	吉村白星	
① 4月3日	*泉泰治郎《富士太鼓》写真あり	
② 2月日不明	*素謡《芦刈》写真あり	
① 4月10日	佐野光太郎	

が数えられるということである。それもプロの演者の専用舞台は、博物館と天下茶屋の服部能楽堂のみであった。大西家の松諷社舞台と岸和田の白水社舞台は大正六年六月から記録され始める。伊丹の小西邸とか網島の藤田男爵邸は個人の家のものであった。しかしながら能にまではならなくとも謡程度のもので

だったら、それこそ場所を選ばず使われているということがわかる。『明治の能楽』などでは拾えなかつた謡人口の広がり、想像以上であつたことが判明するといふものである。

白水社舞台とは、現在も岸和田市にある杉江能楽堂のことである。香山雅代氏の御尽力により伊藤正義先生一行と調査させていただいたことがある。杉江能楽堂は、杉江櫻園が岸和田藩最後の城主岡部長職公の理解と社中の協力を得て設立したものである。元々城内にあつた能舞台は、廃藩置県の際、泉南郡蟻通神社に移築された。明治二十三年に仮設舞台を設けて演能のあつたのを機会に、大正六年に建立されたと言われる。詳しくはインターネット「杉江能楽堂」で出る。大正六年の丁度この時期に能楽写真界同人にいち早く知られることとなつたのである。記念すべき記述なので、次に記す。

【岸和田能楽】

大正六年五月十九日午後一時始於岸和田旧城内白水社能舞台

藩治記念能番組

神歌 安井綱長 千歳 大槻松陽

林喜右衛門

蟻通 谷田民之助

中川順 前川光
曾和鼓 村上義

大江又三郎

杜若 田中耕吉

恋之舞

仕舞

囃子

八島 門林健逸

中川順 財木要

村上義

芦刈 田中鳥參

谷口喜 財木要

村上義

熊野 大島稚桜

中川順 曾和鼓

森田操

桜間金太郎

鉢木 田中耕吉

谷口喜 財木要

森田操

杉江櫻園

狸々 吉田三郎

中川順 曾和鼓

前川光 村上義

附祝言

蝸牛 茂山真一

瓜盗人 茂山千五郎

その日は、同舞台で夜八時から謡曲歌仙会も催している。

博物場についての記述も当然のことながらある。これには大阪博物場能楽堂と共に大阪博物場衆楽館の名も見られる。先に『続東区史』に「御殿風建築の衆楽館というのがあって、百畳敷程の大広間がありました。この広間を見所にして庭を隔てて南面の舞台が別棟で建ててあった」とあるように、衆楽館は見所であったが、十分な広さがあったので仕舞・謡程度のことなら使用できたものであろう。博物場といつてもふたつの場があった訳で、それは繰り返すようだが『狂言辞典事項編』に「そのまま立ち腐れとなった」とするのは、この衆楽館のことであつたものと思われる。

次に九号には、大西亮太郎の新能楽堂が住友家の所有地である南区天王寺堂ヶ芝町に建築予定であることが記されている。

ここで範圍を広げて、大阪には戦前までどれだけの能楽を演じるに足る舞台があつたかということ倉田喜弘『明治の能楽』『大正の能楽』から抜き出し、五十音順に並べる。

阿倍野神社 「朝日新聞」明治十八年五月二十一日付に能舞台新築計画。

生国魂神社 明治十年五月六日。予告が「大阪日報」四月廿六日付、結果が「浪花新聞」同五月八付に記載。

茨木村別院 明治二十七年十月二十一日。「大阪朝日」同二十日付に予告。軍資献金能。

借行社 「朝日新聞」明治二十年二月十七日付に祝宴のこと、二十二日付に工費一千二百円と記す。

河内道明寺 明治十一年四月七日。高村太左衛門主催。予告は「大阪日報」三月十六日付。源正寺坂好静館 明治二十八年十月十九日。「大阪毎日」同十六日付。野村又三郎狂言会。

高津神社 明治十三年六月五日。「大阪日報」同四日付予告。種智院 江戸堀。明治三十年四月三日。「大阪朝日」同三月三十一日付。開院満十年記念。

商業倶楽部 今宮。明治二十二年五月二十二日。「大阪朝日」同十五日付に大阪慈善能楽会の催しとある。

松諷社 明治三十四年十二月七・八日、舞台披き。「大阪朝日」同五日付。「曾根崎中二丁目の大西亮太郎は自今松諷社の月並能を自宅にて催す事になり、七八の両日（晴雨に拘はらず）、其舞台開きとして別会を催す」とある。

神宮教会所 明治十二年十月二十六日。「大阪日報」同日付。場所は東区平野町。

住吉神社 明治十二年四月二十日。「朝日新聞」四月五日付に正遷宮日延べの知らせ。

大安寺 堺南旅籠町東三丁。明治二十九年十月十八日。

「大阪朝日」同十六日付。狂言尽。

鉄眼寺 明治二十二年十二月十四日。「大阪朝日」同日付

に難波村にて高村太左衛門一周忌追善のためとある。

天満宮 大正十一年五月一日付「大阪朝日」に「北区天満

天神社参集所敷舞台で、田中半兵衛氏奉納す」とある。

中之島自由亭 「朝日新聞」明治十九年二月二日付に「控訴裁

判所長児島維謙氏の催し」とある。児島維謙は関西大学創立

者の一人。

中之島洗心館 明治二十七年五月十三日。「大阪朝日」同九日

付。野村又三郎追善狂言。

中之島中央公会堂特別能舞台 大正十五年二月二十一日付「大

阪毎日」に梅若能楽大会の予告。

中之島豊国神社 明治十三年十月十八日。「朝日新聞」十月十

四日付に予告。

中之島ホテル 明治二十九年六月二十日。「大阪朝日」同十六

日付。ホテルでの最初らし。

難波滝の栄 明治十年十一月十八日。予告が「大阪日報」十一

月十六日付。「野村又三郎、高村太左衛門の一座にて能狂言

興行」とある。

能楽殿

大正六年一月二十三日付「大阪毎日」に「市内東区博労町

一丁目能楽師大西亮太郎氏は、今回住友家の所有地なる南区

天王寺堂ヶ芝町に新能楽堂を新築すべく、所轄署を経て二十

一日府保安課に建築願書を差出したるが、六百七十六坪の敷

地に能楽舞台（六十五坪）、見所（百五十坪）、其他鏡の間、楽

屋、橋掛及び付属建坪（七十七坪）を合して二百九十二坪を算

し、其内、舞台は桧皮葺にて古式に抛り、見所は特別席と普

通席の二種に区別し定員六百人を容る、由（中略）又名称は

「大阪能楽堂」と呼ぶ由」とある。そして、大正八年一月十

七日付「大阪毎日」に「大正五年四月大阪市南区堂ヶ芝町に

工を起せし観世流大西亮太郎氏の能舞台は、此程漸く落成を

告げしより大阪能楽殿と命名し、二十四、五、六の三日間、

古例に則り舞台披式能を挙行」とある。

橋岡舞台 「大阪日報」六月十八日付に「橋岡泰次郎氏が建

設せし平野町一丁目の能舞台もいよく落成にて、来る二十

三日、舞台開きの能狂言を催ほす」とある。

備一亭 明治二十三年十一月二日。「大阪朝日」同十月二

十九日付に野村又三郎狂言の会として予告。

枚岡神社 明治十六年六月三日。「朝日新聞」五月三十一日

付に「この般、河内国官幣大社広前の能楽舞台落成」とある。

府知事邸 明治十一年七月三日。「大阪日報」同日付に「当府

知事君の邸内におゐて、野村又三郎一座の能狂言の催ほし」

予告。

鮒卯楼 明治二十七年五月二十五日。「大阪朝日」同二十

四日付に予告。

来迎寺 明治二十五年十月二十日。「大阪毎日」同十月二

十日付。河内国丹南郡にて植木春谷翁追善予告。

五、『関西能楽』の記述

『能楽写真界』と同様、少し遅れて発刊された『関西能楽』

(大正十年(昭和三年))というやはり能楽専門の雑誌が鴻山文

庫に所蔵されている。第一巻第一号は大正十年一月十日発行。

編集兼印刷発行人は田村吉次、発行所は大阪市外天下茶屋大正

橋南中山白峰方となっている。今は法政大学能楽研究所に全一

六九冊(欠号十四卷四号)を見ることが出来る。たとえば第六

卷六号(大正十二年九月二十日)は、大正大震災の特集記事と

なっていて大変興味深い。『能楽写真界』と同様に仕舞・謡だけ

の場もとりたいところだが、スペースも限られているので、以

下に舞台にかかわる文だけをそのまま抜き書きしてみる。

第三卷第八号(大正十一年四月二十日)

坂井光子さんが博労町の自宅に敷舞台を設けた。

第三卷第九号(大正十一年五月五日)

生一左兵衛氏は本月から周防町心斎橋西八竹山栄次郎氏方と

裏新町宇和嶋橋一丁目北の 辻西入伊藤一栄氏方の二箇所

稽古場を設けて(下略)

第四卷第一号(大正十一年七月五日)

生一能楽堂創立十週年祝能 廿五日 天下茶屋の能楽堂で

(下略)

第四卷第四号(大正十一年八月二十日)

大紙倶楽部の敷舞台 板屋橋停留所東の同倶楽部はよく謡曲

会場に使用されるが、今度 高さ一尺五寸幅二間半、奥行三

間の総桧作りの敷舞台を準備(下略)

第四卷第五号(大正十一年九月五日)

大西亮太郎 之まで住友家からの借地であった能楽殿や住宅

の地所も全部氏の所有に帰した。

第七卷第五号(大正十三年三月五日)

生一能楽堂組織変更 天下茶屋聖天坂の生一能楽堂はい

よく株式会社となる旨発表された。同時に生一能楽殿と改

称する。

第十三卷第二号（昭和元年一月二十日）

博物場の能楽堂は府が持て余した結果、曩に生国魂神社の境内へ移転するとの説があつたが、氏子中に反対する者があるので天満天神の境内へ引越す事にきまつた。

第十四卷第五号（昭和二年九月五日）

朝日会館舞台披 九月二十日・二十一日

ちなみに能楽専門の雑誌が大阪でどれだけ出版されていたかを知るよすがとなる記事がある。すなわち第六卷第七号（大正十二年十月五日）に「能楽公論創刊さる。発行編輯印刷人は中島雄二氏。大阪の斯界に療紙の一つ殖えた」とあり、第七卷第一号（大正十三年一月一日）には「五種の能楽紙 能楽国の小天地―その一部の大阪の能楽界に五種の紙が発行されてゐる事はちよつと驚かされる事実です。『能楽世界』は田中鳥参氏が経営する所、氏は大江派のクロウトで、その紙は大江派の宣伝紙です。『生一能謡新聞』は生一門のクロウト石川富峰氏が主宰して、生一派なり氏なりの機関紙である事を語つてゐます。『梅謡界』は其の名の示す如く梅若流に偏したもので、近頃出来た『能楽公論』とかはまだ拝見しませんが、陰には金剛流のクロウト伴新三郎氏が潜いでゐるとか聞きました。今一つは

『関西能楽』があるのです。』とある。確かに一地域に五種もあるのは驚くことである。これも大阪が「大大阪」と言われ、東京を凌ぐ人口を誇り、新聞を始めとした出版文化の盛んであつた時代の反映を示すものであろう。

六、山本能楽堂など

宮本又次氏は先の御論考で戦前の能舞台を大阪能楽殿・天満宮舞台・生一舞台・朝日会館舞台・淡交社舞台・大槻能楽堂・山本舞台の七箇所をあげておられる。博物場の舞台を中心に記したので、ここではあまり触れることのなかつたほかの舞台について、インターネット検索も利用して簡略に紹介する。

山本能楽堂は、大正六年に北久宝寺町松屋橋に十畳ほどの舞台を作つたことを最初として、昭和二年に徳井町一丁目に観衛会舞台を建設するも、大阪大空襲で焼失。昭和二十五年に再建された。

大槻能楽堂は、昭和十年に東区上本町に設立。戦災の難は逃れた。

伊丹にあつた小西邸舞台は、清酒白雪で著名。昭和二十四年、赤穂神社内の大石神社に寄進された。創建年代は不明と言

う。

學術振興会の平成十八年度科学研究費の一部の助成を得た。

まとめ

(せきや としひこ／本学教授)

スペースの関係上、細かいところは述べられなかったが、まとめとしては、大阪には確かに能楽師専用の本格的な能舞台は少なかったが、神社・仏閣など代わりとなる舞台は多く、さらには人々は謡や舞・囃子を楽しむために様々な場所を求めていたことがわかった。能楽専門誌が多数発行されていたこともかわり、大阪ではそれだけ能・謡への人々の興味は広がった。又、博物場を中心にして述べてきた訳だが、現在、豊中にある服部神社の舞台は博物場の舞台を移転したもので、鷺流の舞台ではなかった。鷺流の舞台は既に退転していることがわかった。大阪に絞って記述してきたが、紹介した雑誌類から広く上方の繁栄ぶりも伺える。後考に俟ちたい。

本稿をまとめるにあたり、天野文雄氏・宮本圭造氏ほか六麓会の方々に資料の存在を御教示いただき、又、大阪女子大学（現・大阪府立大学）図書館・法政大学能楽研究所にお世話になった。記して感謝申し上げる次第である。又、本研究は日本